

放射能汚染気の遠くなる闘い

福島県の重い現実胸に

東日本大震災から1年を振り返るインタビュー企画の取  
材で、福島県を訪ねたのは2  
月中旬。社員や地元のため  
に放射能汚染と闘い続ける  
社長がいると聞き、会いに行  
った。

配線器具メーカー福島名工  
社(同県須賀川市)の川村龍  
俊社長(47)。従業員123人  
を抱える。闘う理由は明快だ。  
「この地にいると、疎開も移  
住も難しいことが分かる。社  
員が安心して働ける環境をつ  
くることが、経営者の役目だ  
から」

記者ノート

まず1万平方メートルもある広大  
な会社敷地の除染。防護服を  
着た社員が汚染土を集めてド  
ラム缶十数本に詰め、深い穴  
を掘り2回にわたって埋め  
た。高圧洗浄機で建物に付着  
した放射性物質を洗い落とす  
作業も、週2回の業務として  
続けている。

小化する対策の必要性を説き  
続け、住民にも内部被ばくを  
防ぐための情報を繰り返し発  
信。現在、市は全国でもトッ  
プレベルの放射能対策を打ち  
出している。

除染活動の効果で会社敷地  
の放射線量は昨年末、周辺の  
3分の1に。しかし、時間が  
たつと再び上昇する。気の遠  
くなる闘いだが、「やり続け  
ないと社員はここに残れな  
い。社員あつての会社だから  
と揺るぎない。

福島に残ることも、離れる  
ことも容易ではない現実の中、  
それぞれがぎりぎりの決  
断をしながら生きている。「フ  
クシマ」の今を胸に深く刻ん  
でおかなければならないと強  
く思った。(浪床敬子)

須賀川市は、福島第1原発  
から約60キロ。放射能汚染の直  
自の除染活動と被ばく量を最

取材日：2012年2月15日 福島明工社にて

※記事文中、「名工社」とあの子のが残念(笑)。